

技 が輝く

硯の高級品として知られる「赤間硯」。その歴史は古く、一一九一年に源頼朝が鎌倉の鶴岡八幡宮に奉納した硯が、石の色などから赤間硯であったとも言われています。

名前の由来は明らかになっていませんが、赤間関（現在の下関市）で作られ始めたことから、この名前がついたという説が有力です。

江戸時代に入ると、下関市内で硯に適した原石が少なくなったことか



ら、現在の山陽小野田市厚狭や宇部市万倉の石が用いられるようになります。当時は、長州藩主の許可がなければ採石できなかったもので、赤間硯は貴重な硯でした。明治初年ごろには、生産地も万倉に移ったと言われています。

赤間硯は、「赤色頁岩」という種類の石でできており、この石は石質が

山口県

硬く緻密なため硯に適しており、また、粘りがあるため彫刻しやすいため、特長があります。また、墨液を作り出すためのざらざらとした面が程よくあるため、墨が細かくすれることで、墨色の良い、さらっと伸びの良い墨汁が得られます。赤間硯ですった墨は、仮名文字などの細かい表現に向いています。

硯の原石は、近くの山の中から掘り出します。硯に適した石を選別した後、ハンマーなどを使って板状に割っていき、丸のこ等を使って角形や丸形などの形作りをします。そして、硯の表裏を大のみなどを使って平らに削ったり研磨したりして、一定の厚さの平板を作り、粗彫り、仕上げ彫りをします。最後に、墨をするところ以外を、風化止めとして漆塗りで仕上げます。

この工程のほとんどが手作業で、彫りの技術や技法は代々受け継がれ、百年前とほとんど変わっていません。

実用的な硯だけではなく、立派な彫刻の施されたものや、美術品とし

赤間硯

あかますずり



ての硯も制作されています。また、硯石の端材等で、筆置きや文鎮、置物やアクセサリーなども作られています。

約八百年と言われる長い歴史の中で培われた「匠の技」を伝える赤間硯。昭和五十一年に、伝統的工芸品に指定されました。

お問い合わせ

山口県赤間硯生産協同組合

TEL 〇八三六―六七―〇六四一

山口県地域振興部観光交流局

観光交流課

TEL 〇八三―九三三―三一七五